

としょかんNEWS 第87号



2014年6月13日
湘北短期大学図書館

学生選書ツアー参加者募集

学生選書ツアー【第21弾】を下記の要領で実施いたします。“学生選書ツアー”とは、図書館の利用者である学生自らが図書館にあったらいいと思う本、友達にオススメしたい本を、実際に書店の店頭で手にとって選書するという企画です。また、参加者の皆さんには、店頭で選書をするだけでなく、選んだ本を紹介するポップの作成など展示コーナーをトータルにプロデュースしていただきます。

ご参加いただいた方には、**湘北ポイント 100pt** とおしゃれグッズをプレゼント！お友達をお誘い合わせの上、是非ご参加ください。

- 日程: 8月7日(木)
- 時間: 10:00~12:00
- 場所: 紀伊國屋書店 新宿南店(交通費支給)



● 申込方法

①学生番号②氏名③電話番号④新宿駅までの経路を明記の上、E-mail で図書館 toshokan@shohoku.ac.jp まで、お申込みください。申込期限は、**7月31日(木)**までとなります。詳細については、追って E-mail にてご連絡いたします。

さぼーち倶楽部、活動報告

● 新メンバーの歓迎会で、第6回ビブリアバトル開催！

さぼーち倶楽部が5月15日に新メンバーの歓迎会を行い、その中で第6回 ビブリアバトルを開催しました。さぼ部9名と図書館職員3名、卒業生1名が参加し、総勢13名がそれぞれ持ち寄った本を3分間で紹介。今回は自己紹介を兼ねたビブリアバトルで、参加者の個性あふれる本が選ばれました。今年で4代目となる新メンバーのみなさん、よろしくおねがいたします！

第6回 ビブリアバトル「チャンプ本」発表！

参加者全員で投票した結果、下記のとおりチャンプ本が決まりました。

★人間人間『六百六十円の事情』-Hさん(E1)



湘北に着任して2年目になったが、未だに試行錯誤の連続である。どうすればみんなが興味を持って話を聞いたり考えたりするか、毎回の授業ごとに反省している。そして私は、自分で講義をしながら「今の説明ではわかりづらかったかな」とか「みんな納得した顔をしているな」とみんなの反応を見つつ評価をしている。

その時の私は、世阿弥のことばを借りれば「離見の見」の状態にあるわけである。つまり、講義に集中しつつ、そんな自分を別の角度から眺めている自分があるのである。またこの時、私は自分で話しながら、声の大きさは十分か、内容はわかるものになっているか、と自分の話すことを聞いてもいる。人は他者に向かって話をする時、自分の話すことを聞き手の立場に立って聞くことにもなる。つまり、話すことは聞くことでもある。

逆もまたある。聞くことは話すことでもある。これはどういうことかという、相手の話を聞くときに、私たちは相手の視点に立って相手の話を自分の内側からなぞって理解しようとしているのである。この時、私たちは聞きながら(心の中でだが)話していることになる。

このように、私たちは対話をするときには相手の

視点に立ちながら話したり聞いたりしている。みなさんも、湘北を受験した時の面接で、あるいは就職活動の面接の時、自分のことばはこれでよいのか、うまく言いたいことが伝わっているだろうか、などと相手がどう受け取るか、いうことを考えながら臨んでいたことだろう。

このことは、心理学者の浜田寿美男による『「私」とは何か』(1999, 講談社)にもっと詳しく、丁寧に論じられている。「私」の成り立ちには、他者がいて、「話しながら聞き、聞きながら話す」という対話の積み重ねが基礎にあるという。私たちは、日々対話を通して相手の視点と自分の視点を交換しながら、他者との世界を広げる一方、実は「私」の内的な世界を生み出してもいるのである。

話を授業に戻すと、やはり人の話を聞かないのは何の対話も起こらないので論外だろう。相手の視点に立つこともないし、そこでは「私」が育まれることもない。授業がわかりづらかったら「ここがわからない」と直接言ってもらいたい。新たな対話を生み出す契機となるし、みんなの表情を何うアンテナの精度を高めるきっかけにもなるので、ぜひお願いしたいところである。

私が一番好きな和田重正先生のエッセーは「みかんの香」である。それは「風が吹けば、丘陵をいくつも越えて遠くのみかんの香が運ばれてくる。／風がなければ丘も谷もみかんの香でむせかえるようだ。／みかんの香は苗代の匂いと母の匂いを想わせる」と始まり、中段で「小田原に来てから、毎年、みかんの花咲く頃は父と裏山を歩いた。その時私は必ず、苗代の匂いと母の匂いの、あの話を父にした。父は遠くの海の方を見ながらたいてい黙って聞いていた。だが『その時カワヅは鳴いておらなんだがネ』ときいたことが三度ある。父の心の中では何かの連想があったのだろう」と父の思い出を記す。そして「父の姿も地上から消えて、もう五年になる」、「みかんの香は、記憶にない母の匂いを呼び起こしてくれた。それは随分長い年月だった。今は、それに、父のありありとした思い出を加えて、私に悠久の生命の流れを実感させてくれる」と綴られたのであった(『山あり花咲きて父母いませり』柏樹社、1967年)。

このエッセーを、私がふと思い出したのは、今から十五年ほど前、前任校で女子ソフトボール

部の監督として、酒匂川の河川敷グラウンドでインカレ全国大会への出場権をかけて関東予選を戦ったときのことである。文教大学を辛くも延長で振り切り、連続3年、3回目の出場を決め、国府津方面の丘陵を眺めた。昔、その先の大磯の高台に、私はつましく家庭をもち、そこで出会った方々との交友が今も続く。大磯で生まれた娘には、いま二人の子どもがいる。現在、私の保育学科の実習巡回先は、多少なりとも土地勘のある小田原を中心に組んでいる。曾我の梅の蕾がほころび始めるころ、その先には真っ白な富士山が聳え、6月には緑したたる丘陵地から小田原、真鶴の海沿いに車を走らせる。9月は蟬ぐれ—先生は「蟬ぐれは人の心を鎮めるものか、掻き立てるものか、どちらとも取れる。心が湧き立っているときは鎮静に働かし、沈み返っているときは浮き立たせる」とも書かれている。

私にとって、巡回は自然と人間の関係を考えるきっかけになった。先生がおっしゃる「悠久のいのち」ということも、少しだけであるが分かってきたかなという気がする。